

『ルバイヤート』を想う

田中 史郎

昨年（2003年）の夏休みに、見学のためにゼミ生と「ニッカウキスキー仙台工場」に出かけた。一般に、経済学系では見学というと、製造業・流通業・金融業・マスコミなどがその対象になるが、前年に「日銀仙台支店」を見学したので、とりあえずは金融業をさけたという以上の意味はない。しかし、学生に酒造りの現場を見て欲しいと思ったことも事実である。発酵のメカニズムや、醸造酒と蒸留酒の違い、そしてウイスキーに限っていえば、モルトウイスキーとグレーンウイスキーの違いなども知っていて無意味ではなからうと思った。

そんなことを考えているうちに、かつて読んだ『ルバイヤート』をふと思い出した。知っている人も多かろうが、『ルバイヤート』とはオマル・ハイヤームによって創られた数々の四行詩集であり、その全てが酒を謳歌したものである。ちなみに、オマル・ハイヤームは11～12世紀のペルシャの自然科学者であるとは明らだが、『ルバイヤート』には「異版」も多く解明されていない点もあるとのこと。また、日本では明治以来幾つかの翻訳がなされており、それぞれの訳文も微妙に異なっている*。そうしたものの解説を見ると、著者ハイヤームと『ルバイヤート』には、「享楽」「刹那」「虚無」「神秘」「諦観」と言った言葉の類で現される批評がしばしば為されている。

ともあれ、本棚を見回しても本書がなかったので、再度、「岩波文庫版」を購入し読んでみた。確か大学浪人時代の1970年頃に読んだ記憶があるので、30年以上が経過しているが、驚いたことに、かつてわずかに記憶に残っていた詩と同じそれに目が留まった。それは次のような詩である。

大空に天輪がめぐり始めてから、
紅の酒ほど善いものは見あたらない。
不思議なのは酒を売る人のこと、
この善きものを売っていったい何に換えようというのだろう。

やや生意気な言い方をすれば、詩はほとんど全て隠喩の結晶だといってよいが、そうだとすれば、この場合の「酒」とは何か。かつて読んだときも、そして今回また読んだときにも、それは人間の「魂」に他ならないと直感した。むろん、それを「正義」や「友愛」と考えてもそう外れてはいないだろうが、やはり「魂」が一番よく合う。つまり、こうだ。

大空に天輪がめぐり始めてから、
紅の「魂」ほど善いものは見あたらない。
不思議なのは「魂」を売る人のこと、

この善きものを売っていったい何に換えようというのだろう。

このように「酒」に「魂」を代入してみる。そうすると前半の「紅の「魂」」という表現が出現し、これも吟味に値する言葉だが、とりあえずこれには立ち入らず、後半を問題にしよう。ここでは婉曲的に疑問形で述べられているが、そのようなものでないことは明らかだ。おそらく、ハイヤームの生きた時代と社会にあっても「魂」を売り渡す人間が居たのだろう。もちろん苦渋の選択として「魂」を売り渡す場合もあれば、そうしたことに無自覚ですら場合もあるだろう。しかし、いずれにしてもそれらに対して根源的な批判がここにこめられていることは容易に理解できる。決して「魂」を売り渡してはならない、と。

このような解釈が正当であるか否かはともあれ、少なくとも私にはそのように理解できるのである。既述のように、ハイヤームや『ルバイヤート』に対しては、「享楽」や「諦観」といった言葉が投げかけられているが、それとは全く反対の、きわめて強固な「意志」を感じざるを得ない。あるいは、「享楽」や「諦観」を突き詰め、それをいわば超越すると、その対極まで行き着くのかもかもしれない。いずれにしても、『ルバイヤート』には、その読者に根源的な内省を迫る何かがある。

前置きが長くなりすぎた。しかし、ここまで読了されれば、私の意図は自ずから察せられることだろう。今後の人生において、様々な選択の時が訪れに違いない。そしてそれは、判断が難しく、あるいはまた苦渋の選択となることもあるかもしれない。しかし、そのような場合の判断基準は、それを敢えて単純化して言えば、「魂」を売り渡すか否かにあるように思えてならない。『ルバイヤート』を再読し、そんなことを考えた次第である。むろん、自戒を込めて…。

ところで、本卒業論文集は「アウフ」と名付けられた。もちろん、アウフとはドイツ語の a u f であり、aufheben のそれである。英語では on や up がこれに近い語だが、ともあれ「上へ」ということをイメージしてこの名前にしようと考えた。10年後や20年後には何処まで遠くに、そして何処まで高く翔んでいるだろうか。

*とりあえず手元に揃えた各版は以下のようである。

『ルバイヤート』小川亮訳（岩波書店、1948年、1993年）

『RUBÁIYÁT』安齋七之介訳（太玄書房、1973年）

筑摩世界文学大系『インド、アラビア、ペルシア集』黒柳恒男訳（筑摩書房、1974年）

『ルバイヤート』森亮訳（国書刊行会、1986年）

『万国仙果 I、イスラム世界』森亮訳（小沢書店、1990年）

（田中ゼミ卒業論文集『アウフ』No.1 より。2004年3月）